

## 研修報告の部

### 東 ド イ ツ あ れ こ れ

足利市立毛野南小学校

新 井 とみ子

#### 1 はじめに

私が海外研修に参加したのは、昭和60年9月11日から30日間であった。訪問国は、スイス、東ドイツ、アメリカの3か国を中心に、フランス、西ドイツをかけ足でといったところである。これらの主訪問国では、学校訪問をしたり、教育委員会関係者との話し合いも持たれた。もちろん、その他いろいろな文化施設などの見学もした。おかげで、その國らしさ、というもののが少しは感じられたように思う。また、この3国は、政治体制が三者三様に異なるのも興味深かった。(スイス——永世中立国、東ドイツ——社会主義国、アメリカ——自由主義国)

しかし、研修を終えてすでに一年以上の時間が経過してしまった現在、当時の感激や印象もおぼろげになってしまったものも多いが、ここでは、日常あまり縁のない東ドイツ(ドイツ民主共和国)を中心に、思い出のページをめくってみたい。

#### 2 ベルリンで

今回の研修で訪問する都市の中で、私はベルリンに一番関心を持っていた。それは、ベルリンの壁が見られるという事と、東西二つに分断されたベルリンを、その両側から見られるという事などからである。

朝鮮が、大韓民国と朝鮮民主主義人民共和国に分かれていたり、かつてはベトナムも南北に分かれていた。それと同じように、ドイツも西と東に分割され、しかも、ベルリンは、東ドイツの中で、さらに東ベルリンと西ベルリンに壁一つで分けられているという。もとは同じ国民であるのに、戦争に負けたというだけで、国境あるいは壁一つ隔てて全く別の国民にさせられてしまっている。そんなことができるのでしょうか。

日本も敗戦国として、まちがえばドイツと同じような運命をたどっていたかもしれない。そんな恐ろしさを感じながら、ベルリンを訪れたのである。

##### (1) 検問所

私達は、まず西ベルリンの飛行場に降りた。しかし、宿泊するホテルは東ベルリンである。これから国境を越えるのである。

東側からバスが迎えに来ていた。そのバスに一步足を踏み入れたとたん、「えっ」という言葉以外出なかった。実用本位で何のかざり気もない車内、堅いシート、強烈な油のにおい。私達の会話も、次第に少なくなった。それぞれの心の中に、さまざまな思いがかけめぐらでのう。私の心にも、これまでいたスイスが「明」なら、東ドイツは「暗」になるのではないかと予想され、しだいに沈んでいった。

バスが走り出したのは、午後8時を過ぎていた。街は照明も明るく活気に満ちていた。車の通りも激しい。バスは、西ベルリンから東ベルリンへ入るのである。西側からの旅行者は、チャーリー検問所を通過しなければならない。

チャーリー検問所に近づくあたりからは、車の数も少なくなる。アメリカ、イギリス、フランス3国の管理する検問所のようなものもあったが、そこはフリーパス。そして、バスはチャーリー検問所に到着する。あたりはまっ暗だ。周囲は、高い建物があるらしいが、そこからは、明りももれてこない。今は全く使われていない廃墟のようだ。そして、検問所の一角だけが明るいのである。もちろん、人影も見えない。そのうち、係官が現れ、バスに乗り込んできた。添乗員と何か話してから、一人ひとりのパスポートを集めはじめた。それが写真と本人の顔を何度も見比べ、ゆっくり作業を進めるのだ。なんとその係官は女性だったのであるが、その作業中、笑顔一つ見せず、眼鏡の奥に鋭い目が光っていた。バスの中はただ沈黙。私達の眼もその係官に注がれていたのは当然である。その女性係官が私達のパスポートを持ってどこかへ消えたあと、今度は別の係官が来て、バスの中をくまなく調べ、バスのトランクまで開けて私達の荷物を調べていたようである。私達は、一時の緊張もほぐれてきたが、バスから降りることもできず、自分達だけが監視されている中で不安な時間を過ごした。ここで写真を撮るとフィルムを没収されるなどと冗談もでたが、実際に写真は撮ってはいけないということだ。

バスが検問所を通過するまでに20分以上かかった。しかし、この20分は、私達にとって長い長い20分であった。

いよいよ東ベルリン、照明の明るさ、建物の様子、車の流れ、人の動き、そのどれをとっても何か西ベルリンとは違うものを感じつつ、ホテルに着いた。このホテルは、西側旅行者専用だそうで、立派で豪華だった。

遅い夕食の時、ピアノ演奏で、さかんに日本の曲を演奏してくれた。暗く沈みがちな心を元気づけてくれたようだった。

## (2) ベルリンの壁

2日目、午前中は東ベルリン市内の見学だった。また昨日のようなバスに乗り、出発した。市内をあちこち案内してくれたが、ほとんどの所はバスに乗ったままである。

ちょうど土曜日だったが、どの通りも、人も車もその数が少ないので驚いた。ただ広い通りには、少し色づいた菩提樹の並木が美しかった。中心街は、歴史的な建築物も多く、そこにはたくさんの彫刻が刻まれ、当時のなやかさを想像させるに充分である。また、政府関係の建物は、それと対照的に近代的な建物であった。しかし、中心街からちょっとはずれると、まだあちこちに、戦災にあって崩れかけたままの建物や、修復中の建物が見られた。戦後40年もたっているのに、と不思議だった。あまり目立たない通りに、森鷗外が留学していた時の家があった。今は記念館になっているらしいが、入口に小さいプレートがとりつけてあるだけだった。そこもバスの中からだけ。やっとバスを降りたところは、広くて緑の美し

い公園のような所だった。ここは、ソ連兵士戦没者記念碑があるところであった。パンフレットによれば、「この記念碑は、ヒトラーのファシズムと闘い、ベルリンを解放して戦没したソビエト兵士たちに捧げられたものです。」とある。ここはドイツ（東西どちらにせよ）なのに、なぜソビエト兵士なのか、だったら、ドイツ無名戦士の墓を見学させたらいいのになど、なぜ、どうして、と思うことは外にもたくさんあった。しかし、通訳を通しての話しか聞けないし、その日本語もはっきりしないところもあったので、それらに対する解答は何も得られなかった。その後、ペネガモン博物館を見学して、東ベルリンの見学は終わった。

午後は、西ベルリンの見学である。また、国境を越えるのである。そして、あの検問所を通らなければならない。昨日の経験があるのでいくらか気分はらくだが、あまり気持ちのよいものではない。昨晚の今日なのだからさっさと通してくれればいいのに、と思うのは、何も知らない私達の浅はかな考え方。例によって厳しいチェックを受け、やっと出られた。昨晩は周囲がまっ暗だったため、辺りの様子はよくわからなかったが、やはり、廃墟になったビルや、監視所があり、こちらを監視しているような兵士の姿が見えたりして、無気味だった。

検問所を出ると、私達はバスから降ろされ、西側のバスに乗り換えた。私達が東ドイツ滞在中、ずっと世話をしてくれる通訳のガブリエルさんは、検問所に入る前に降りてしまった。あとで聞いたところ、西側へはよほど有名なスポーツ選手にでもならない限り、行くことはできないとのことであった。東ドイツの人々にとって、「壁」は厚く、自由世界とは遠く隔てられているような気がした。

西側へ出てみると、やはり車の通り、人の通りは多かった。ショーウインドーのはなやかさを見て、ホッとしたものだ。とにかく活気にあふれ、生き生きと息づいているようだった。

いよいよベルリンの壁の見学である。東側では、バスに乗ったままだったし、説明の中にも壁にふれた話はでてこなかった。ところが、西側では、壁のそばに高い見学台まで作って見学できるのである。壁ごしに東ベルリンを望むこともできる。しかも、壁は、大きな野外キャンバスとでも言おうか、壁一面に原色で絵やら文字やらが描かれている。書きなぐつてあるといった方がピッタリする。東西

の壁のとらえ方の違いであろう。

では、この壁はどうしてできたのか。

それは、『1961年8月13日、突然東ドイツ政府が構築したものである。それは、戦後急激な復興を遂げた西ドイツに比べ、東ドイツの経済が停滞し、両者間の生活水準の格差が激増したため、西への逃亡難民激増したため、東西ドイツの交通を厳しく統制するためにつくったものである。』とある。

その後、この壁により、労働力の流



ベルリンの壁

出がとまり、東ドイツも経済が盛んになっていったという。しかし、それでも壁を越えようとした人々はいたようで、近くにそのために犠牲になった人々の記念碑があった。ごく最近の日付があるのには驚いた。

帰りは来た時と全く同じことをくり返して、ホテルに帰り着いた。

ゆったりとした夕食後、街へ出てみた。外出などは全く自由である。言葉はわからないが、タクシーでベルリンタワー（テレビ塔365m）まで行った。そして、これも身振り手振りで券を買い、行列に並んで展望台へ上った。ベルリンの街が一望のものと眺められるところであった。しかし、どこが何だかは全く分からぬが、昼間見たブランドンブルグ門だけは、ボーッと浮き出したように見えた。この門がウンター・デン・リンデンという大通りの東西の境になるところで、東側の照明が赤く光り、両側は青白く輝いているのが印象的であった。

帰りは歩いて帰ることになった。ちょうどホテルの近くに、日本の建設会社が建てたという貿易センタービルの高い建物があったが、それを目当てにして歩いた。そして、先ほどのウンター・デン・リンデンの通りを歩いていった。この通りは、かつてのベルリン市の中心街だったそうで、当時の面影を残す歴史的な建物が並んでいる。そして、照明に照らし出された影刻で、あたり一帯が、さながら美術館といったような感じだった。ちょうど国立オペラ劇場の前を通った時、着飾った人々が、音楽の余韻を楽しむかのように静かに出てきた。そして、菩提樹の並木を歩いていた。その外、レストランやディスコなども、老若男女でいっぱいだった。

しばらく行くと、次第に人通りもなく、通りも暗くなっていた。正面には、ブランドンブルグ門が見えた。私達は二度とないチャンスなので、そこまで足を伸ばすことにした。もう車の通りも行き会う人も全くない。なぜなら、この道は行き止まりなのである。広い通りに照明もなく、ぼだい樹の木々がよけい黒々と見えた。そして、そのまっ暗な中に警備兵だろうか、通りの両側に20mおきぐらいにじっと立っているのである。昼間通った時には気がつかなかった。こんな所を私達が歩いていいのかなどと思いながらも、怖いもの見たさで歩き続けた。門の前で行き止まりだが、その周辺には兵士が何人もいた。壁も見えた。ただ白いだけの壁が。

ところが、驚いたことに、壁のむこうから、にぎやかな音楽がガンガン響いてくるのである。しかも、煌々としたライトの光りも。ちょうど土曜日、若者にとって楽しい時間だったのかもしれない。

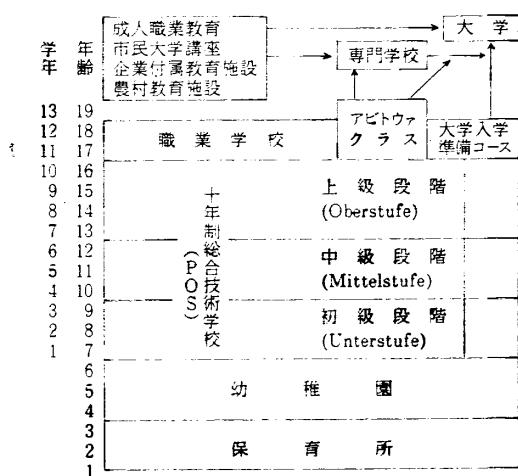
この「壁」を隔てた両者の違いをどう見たらいいのか。そう簡単に答えの出る問題ではないが、何かズッシリと重いものを心に感じながらホテルに帰った。時計は12時を回っていた。

### 3 学校教育

#### (1) 教育制度

ドイツ民主共和国の憲法では、「すべての市民は教育を受ける平等の権利をもち、国家は成績原理と社会的要請に従い、大学に至るまでの高度な教育段階への進学の可能性を保証する。」と規定している。そして、3年間の幼稚園と10年間の総合技術学校、2年間の職業学校、計15年間の授業料は無料であり、専門学校や大学の学生に対しては、成績に応じて奨学金が与えられている。

東ドイツの学校系統図



#### (2) ブルグの教育

東ドイツは15県よりなる。私たちの訪問地は、マクデブルグ県の郡都のブルグである。しかし、国家統制のもとでの教育であるから、全国同一カリキュラム、同一教科書で指導されているのである。地域や学校ごとの特色などは怠慢になく、「全面的に調和した社会主義的人格の育成」ということを目標に掲げ、国中で同じ教育が行われていることになるのである。

#### (3) 学校訪問をして

私達は10年制総合技術学校（オーバーシューレ）を3校訪問した。今回の海外研修で、外にスイスやアメリカの学校も参観したが、授業の形態から見ると一番日本に近い形をとっているように見えた。というのは、一斉授業に近い指導法、教室内の机の配置の仕方などからである。そして、どの教室からも授業に取り組む子供達の真剣さがひしひしと感じられた。これが、これからさらに発展しようとする国家の力なのかもしれない。

東ドイツの10年制の学校では、1年生から3年生までのための学童保育も行なわれている。この国の労働力の約50%は女性だ

学年級	オーバーシューレ週間課目表									
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
ドイツ語	11	12	14	14	7	6	5	5	3	4
ロシア語	-	-	-	-	6	5	3	3	3	3
数学	5	6	6	6	6	6	6	4	5	4
物理天文学	-	-	-	-	-	3	2	2	3	3
工科作業	1	1	1	2	2	2	2	2	1	2
内国芸術	-	1	1	1	-	-	-	-	-	-
総合技術教育	-	-	-	-	-	4	4	5	5	5
歴史	-	-	-	1	2	2	2	2	2	2
公民	-	-	-	-	-	1	1	1	1	2
図画	1	1	1	2	1	1	1	1	1	-
音楽	1	1	2	1	1	1	1	1	1	1
スポーツ	2	2	2	3	3	3	2	2	2	2
週間授業時間	21	24	27	29	31	33	32	33	31	33
裁縫	-	-	-	1	1	-	-	-	-	-
第2外国語	-	-	-	-	-	3	3	3	3	2
合計	21	24	27	30	32	33	35	36	34	35

というから、母親の大部分が働いているということになる。そのため、専任の先生がついていて、放課後の遊びはもちろん、宿題、おやつ、昼寝まで面倒をみてくれるのである。だから、昼寝用のベッド、遊戯室なども完備している。母親達は安心して仕事をすることができるだろう。

それから、放課後などの余暇を利用したクラブ活動も盛んだということで、合唱や図画など40種もあるそうだ。中でも一番意外だったのは、ディスコがあったことだ。校舎の地下の部屋で、赤や黄の照明がまぶしかった。全部子供達が作ったそうである。国家にとって有用な人物を育てるという中にも、自由な雰囲気があふれていた。

そのほか、備品、教具（特に視聴覚教具）などまだ十分でなかつたり近代化されているとはいえない面もみられたが、しかし、その中で先生方が工夫し、熱心に指導している姿はすばらしかった。

東ドイツに着いてから、「国家統制」という言葉からくる重圧感と違和感、ベルリンの検問所での印象から、ともすれば暗い気持ちになりがちで、重い足どりで学校訪問に臨んだ。ところが私達を迎えてくれたのは、校庭の金網に鉛なりになった子供達の笑顔であった。校内で会った子供達も、かわいらしい1年生から、ひげのはえかかったような10年生まで、みんな明るく真剣な表情だった。私達を案内してくれた先生方も女性が多く、皆はつらつとして、情熱にあふれていた。3校とも校長先生は女性で立派だった。校門を去るバスの窓から手を振りながら、明るい気分にひたったのは私一人ではなかったろう。子供達の笑顔と女教師達の情熱が、心の「壁」をとり除いてくれたのである。

この10年制の学校以外に、大学進学のための高校や大学も見学した。いくつか興味あることを記しておく。

① 学生は全員F D J（自由ドイツ青年同盟）に加入している。国家への忠誠が、成績より



先生方、後列左が校長



レーニン学校の子供達

重要なウエイトを占める。

- ② 高校卒業後、女子生徒はストレートに大学へ進めるが、男子生徒は、1年の兵役（義務）を済ませてから進学する。
- ③ 大学では、授業料は無料。全員奨学金がもらえるが、成績により額が異なる。200マルク十（成績により）150マルク、120マルク、80マルクが加算される。
- ④ 学生寮も完備（13階建）。寮費は1カ月10マルク。学生結婚も多いということで、そのための部屋もある。

#### 4 スポーツ振興

近年のオリンピックや国際的な各種スポーツ競技会での東ドイツの活躍ぶりはめざましいものである。なぜ急速に力をつけてきたか興味深いところである。ちょうど私達が訪問したマグデブルク大学に、神戸大学から体育関係の岸本先生が研究にいらっしゃっており、その方面の事を調べておいでだった。

『東ドイツは、発達したスポーツ医学を活用して、国家的規模でスポーツ人口の拡大、水準の向上をはかっている。』ということである。そして、それは、各地区に体育連盟という組織を作り、スポーツ各分野にわたり専門のコーチがついて、小さい時から指導しているのである。私達も幸いなことに、体操と水泳の指導の場を見学することができ、なるほど、とうなづいたのである。



体操の練習風景

体操は、レーニン学校の体育館で低学年の女子8名が練習していた。授業は午前中で終わり、ブルグの町の選ばれた子供達がここに集まって練習している。専門家が2人ついてきびしい練習ぶりだった。そして、すばらしい技を見てくれた。

水泳は、町に温水プールがあった。そこには、大きいプールや小さいプール（底が上下して深さが調節可能）もあり、専門のコーチが5名ついて指導している。私達がいった時は、やはり小さい子供達が、能力別に指導を受けていた。

これらの練習は、ただ好きだからやるというのではなく、実力が伴わなければならない。そして、実力があればどこまでも伸ばしてくれるようだ。すべて国家のため、国威高揚のためなのだろう。私達が出会ったこの子供達も、いつかきっと立派な選手になり、東ドイツの星になるにちがいない。

## 5 おわりに

30日間の研修中、一番困ったのはやはり言葉である。それは東ドイツに限ったことではない。スイスでは、チューリッヒではドイツ語、学校訪問をしたラショードフォンではフランス語、そして東ドイツでドイツ語、パリでフランス語。とにかく場所が変わるたびに言葉も変わった。しかし、スイスにいた時は、英語の単語を並べただけでも何とか通じた。とはいいうものの、コーヒーを注文したわけがコーラが出てきたり、スペゲッティーをたのんだのにピザが出てきたり、いろいろ失敗はあった。ところが、東ドイツでは、市民生活の中ではほとんど英語は通じなかつた。外国語として勉強するのはロシア語を中心だそうで、7年生から英語も学習できるようになつてゐるらしい。

ところで、団員の中に、東ドイツで陸上競技に関する本を買ってきてほしいと頼まれた人がいた。その人がいかにして目的の本を手に入れたか、おもしろい話がある。それは、本屋へ行って、それらしい本をつけたがみつからない。店の人へ聞こうにも、言葉が全く通じない。そこで苦肉の策、「よーい。ドン」と言って、床に手をついてスタートの真似をしたそうである。ようやくめざす本を手に入れることができたという。

このように、身振り手振りででも何とかわかりあえる事も多い。しかし、自分の気持ちとかちょっと込み入ったことになると無理である。もし、自分で自由に英語が話せたら、もっと多くのことを知ることができ、深く理解できたろうにと今になって思う。これからの中社会に生きしていくためには、英語は欠かせないものになつていくだろう。

私達の通訳をしてくれたカブリエルさんは、フンボルト大学を卒業したての美しい人だったが、彼女は、大学に入ってから日本語を勉強したそうだ。そして、教材もあまりなく、新聞などを使って学んだという。チャンスがあればぜひ日本へ行きたい。と話していた。そして、たぶんだめだろう。と言ったさびしそうな顔が今も浮かんでくる。

現在の日本では、学ぼうとすれば、教材、教具、そして指導者にも事欠かない。これからの中時代を背負う若者には、ぜひ堂々と英語（外の外国語ももちろん）を話せる国際人になつてほしい。

こうして書いてみると、遠い昔のでき事のような気がして海外研修だか、あとからあとといろいろな事がうかんでくる。そして、言い古された言葉だが「百聞は一見にしかず」という諺の意味を、身をもって実感している。

- 参考資料
- ・世界各国便覧叢書 ドイツ民主共和国・ポーランド人民共和国  
外務省欧亜局東欧課編
  - ・昭和60年度第11回 文部省教員海外派遣団報告書